NPO 法人・歴史文化財ネットワークさんだ　　第 97 号　2024 年 5 月 1 日発行(隔月刊)

# 歴ネットさんだ通信

今号の投稿

母子永澤寺　通幻禅師と竜の鱗－猪名川杉生景福寺で公開…………… 脇田　孜………1
川本幸民の＜つり合い＞問題…………………………………………… 黒田亮二………3
中後茂さんを偲ぶ(寄稿文を振り返って) ……… ………………………… 編集子………6
「歴ネットさんだ」お知らせコーナ

## 【三田の民話】　母子永澤寺　通幻禅師と竜の鱗
## 猪名川町杉生　景福寺で公開される

**脇田　孜**

**通幻寂霊木像・永澤寺開祖**

**清原山 永澤寺(ようたくじ)**は、応安年間(1370 年頃)後円融天皇(北朝 5 代)が時の室町幕府管領の細川頼之に命じて七堂伽藍を建立させ、高徳善知の誉れ高い傑僧通幻禅師を開祖に迎えた禅寺である。

**永澤寺の寺籍**は、曹洞宗に属し、大本山総持寺【元は能登国櫛上庄(現在の輪島市)にあったが、明治44年に横浜市鶴見区に移転】の直末寺で、末寺は 17 ヵ寺を数える。摂丹境にあり開創後まもなく御円融天皇の祈願所となった。

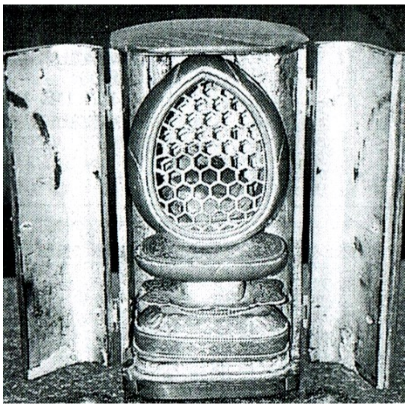
なお、通幻禅師ゆかりの寺院は 8900 ヵ寺を数え、これを通玄派と言い曹洞宗が我が国で最大の宗団になる。又、通幻禅師は指導も厳しく時には悟りを開かない僧を活埋杭に生き埋めにする事もあったと伝わる。

その厳しい指導によって、曹洞宗の大きな勢力になって仏道の流布・宗門の興隆をもたらした通玄の門下には「通玄十哲」とよばれる優れた禅僧を輩出した。

**通幻禅師の出生**　出生地は豊後国国東郡武蔵郷とするもの、因幡国岩井郡とするもの、越前国国府等諸説あり。

出生にまつわる伝承として、・・墓・・から誕生したという日本の民話〈子育て幽霊もしくは飴買い幽霊〉でも伝わる。臨月をひかえて亡くなった母親を埋葬した翌日頃に、こどもの産声がするので墓を掘り起こすと、そこに男の子が生まれていた。その男の子が少年になった時、自分の出生の話を聞き、母親の菩提を弔うために出家する志を抱いた。この少年が後の通幻禅師だったという。

なお、明徳2年(1391)通幻禅師は亡くなったが、「吾れ去って後、汝ら諸人まさに万縁を屏息して一大事を究明し、洞上の玄風を地に墜ちざらしむべし。もし文字語言・名聞利養に貪著せば吾が


竜のうろこが納められているという厨子
（神戸新聞より転載）

徒に非ざるなり。時至れり。吾れ逝かん」とし、次の遺偈(辞世の句)から「甲子を算計するに満七十年。末後の一句。両脚天を踏む」から逆算して元亨2年（1322）の生まれとされる。

生まれた時から神童に仕立てられるまでもなく、生きる力を存分に秘めて裸のままで生まれ出て、人の運と仏の縁に恵まれて、力強く当時の時代を生き抜いた禅僧の生涯に、篤い敬慕の念を抱かざるをえない。

**【三田の民話】 通幻禅師と竜の鱗**

『禅師が座禅をしておられた或る夜のことです。外で何者かが立っているような気配がする。次の日もその次の日も同じように感じるので、禅師が「カーッー」と一喝しておいてから、「お前は何者だー」とたださされますと、「今、わたしは女性姿になっています。迷いが晴れず、悩み苦しんでいます、」と女の人は答えました。「では、教えてあげよう。明日より千百十一日間（約3年間）毎日、お線香とお水をお供えし、すべての邪心をすてなさい。若し、一日でも欠かすものなら、今の悩みや苦しみは十倍も、百倍もなろうぞ。」

女の人は、雨の日も、風の日も、雪の日も、はだしのまま毎日通い続けました。とうとう待ちに待った約束の日がやってきました。その朝、禅師は「カーッー」と一喝し、呪文をとなえられました。女に人の姿はたちまち消え、そこには大きな竜が現れました。「お蔭様で悩みも苦しみも消え、もとの姿に帰れました。これひとえに禅師様のお蔭です。ご恩返しはできませんが、わたしの鱗を差し上げます。」と言って、鱗を差し出しながら「私が天上へ飛び立つと、あとに泉がわき出します。もし、この平和な村が大旱魃にでもなれば、この鱗にその水をかけて雨ごいをしてください。けれど、この鱗は、雨ごい以外は絶対に人には見せてはなりませぬ。」そして竜は「ギャオーオー」と大声を発し、西の空へと舞い上がっていきました。紫雲の帯のように尾をひいていき、いつしか竜の姿は消えていきました。そこに竜の鱗九枚が置かれていました。』

これが永澤寺にまつわる民「通幻禅師と竜の鱗」であるが、現在同寺には「竜のうろこが収められているという厨子（写真）が残されている。

**……三田：永澤寺から猪名川町：景福寺に継がれる竜の鱗……**

**【景福寺の誕生秘話】**

『景福寺を開山（寺をお開きになられた初代住職）した方は、永平寺と共に曹洞宗の大本山総持寺（横浜市）で、総持寺第五世の住職通幻寂霊（以下通幻）という禅師様。はるばる猪名川町へやってきたとき、道で屈んで休憩していたところ、六瀬の土豪平尾越中守にいおりを使ってくださいと声をかけられたことで猪名川町に腰を据えることとなった。

そこから 5 年経ったある日、夢枕（夢の中）に仙人が現れた。北西の方向へ現れたので、通幻は起きるや否や飛び出していった。その地、三田には後に通幻が永澤寺というお寺を建てるのだが、なんとその井戸から龍が飛び出してきた。龍は天に登り鱗を9枚落とされた。こうして龍の鱗は地上にやってきた。

その後、通幻の弟子が鱗を一枚持って前述の猪名川町の庵に訪れて建て直し、景福寺を開山。師、通幻を初代住職として迎えた。火災などで現在は近くの別の場所に建て替えられた景福寺だが、龍の鱗もこの伝承とともに大事に保存されている。』(景福寺ホームページより)

**【竜の鱗は本物なのか？】**

景福寺47代住職は「伝承を大事にする気持ちは大切。でも今に時代〝竜の鱗〟の正体が何か分かってもいいのでは」とフジテレビ(関西テレビ)の「世界の何だコレ？ミステリー」に鱗の調査を依頼。同番組が岐阜のパレオ・ラボで分析すると生き物のものであることが判明。

そこで三田市にある兵庫県立人と自然の博物館に調査を依頼、「センダンコウの鱗」だと判明した。センダンコウは堅い鱗で全身が覆われた哺乳類で、東南アジアとアフリカに4種ずつ計8種生息。中国では以前は「龍鯉」と表記され、鱗は漢方薬として用いられていた。近年は、肉や鱗を目当てに蜜猟のため絶滅が危惧されて2016年ワシントン条約により全てのセンダンコウが国際商業取引で禁止された。センダンコウのはく製を入手された猪名川町親善大使を務める川西市在住　松本篤弘氏が昨年辰年である 1 月にセンダンコウはく製を入手され景福寺に寄贈。竜の鱗とはく製の対面となった。

# 川本幸民の〈つり合い〉問題

**黒田亮二**

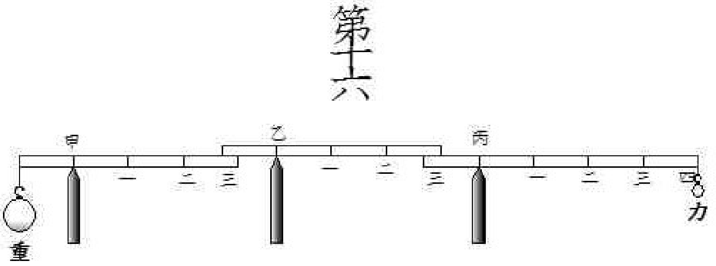
「わたしたちの身の回りには、小さな力でも、楽に作業ができる道具がある」と小学校で〈てこ〉について学び、そこで〈力点〉〈支点〉〈作用点〉という言葉も習った。〈つり合い〉の問題として、〈支点〉の左右に吊す〈おもり〉と〈支点〉からの距離の関係を実験的に確かめた。

「小さな力でも、楽に作業ができる道具」として、幸民の訳述した『気海観瀾広義』の巻六には「運重器者司以小力能運重大矣(運重器は小力を以て能く重大運ぶを司る)」と書かれ「運重器」のタイトルがついている。ここでは、槓杆(てこ)、天平(てんびん)、滑車、輪盤、斜面、鉞鑿(マサカリとノミ)、藤線(ネジ)が紹介され、「運重器ハ重ヲ擧ゲテコレヲ他處ニ移ス等ノ用ヲ司ル者ニシテ一人ノ力ヲ以テ多人ノ力ニ代ルヘク、又聚多ノ力ヲ以テ速ニ物ヲ運スヘシ」と説明されている。

いまの〈力点〉〈支点〉〈作用点〉にあたる用語は、『広義』には「力点」「定点」「重点」として「槓杆」

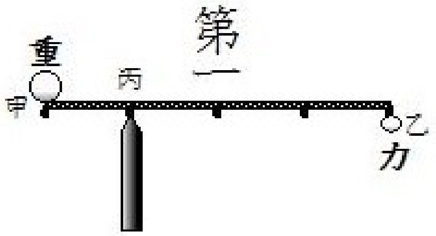
の解説のなかで使われ、用語には違いが見られるが、〈支点〉を中心にした「つり合い」において、おもりの重さと腕の長さの関係について説明されている。

右図のような図が出ている(『広義』の図を写した。以下同じ)。右端の〈力＝1〉としたとき、左端の〈重〉はいくらになるでしょう。




ところで、中村邦光・板倉聖宣「日本における「てこの原理」の数学的理解の歴史」(『科学史研究』Ⅱ、24(1985)p129-140)によると、「てこの原理」について数学的に厳密な理論は、古代ギリシャのアルキメデスによって明らかにされたものらしい。城郭の石垣を築いたりしてきた日本人も経験的に「てこ棒が長いほど楽」ということをは知っていたはずだが、江戸時代の人は、数量的な理解には至ってなかったということだ。この論考では、江戸時代の数学書の中から「てこの原理について数学的に厳密な理解を必要とする問題」を探し出したが、ほとんどは「数量的な理解をもっていないことを示していた」とある。(詳しくは、この論文を見てほしい)

そのような状況にあって、数学的な説明を加えることになったのが『気海観瀾広義』だ。『広義』巻六には、いまの小学生が習うのと同じような、おもりと腕木の長さの関係が示されいる。




> コヽニ一杖アリ。甲端ニ三錢ヲ掛ケ、乙端ニ一錢ノ球ヲ掛クレバ、其平均スル處ハ其杖ノ全長四分一、大球ニ近キ處ニアリ。是レ三錢ニ四分ノ一乗シテ、三トナリ、一錢ニ四分ノ三スルモ亦三トナルコト、猶前篇ノ重ニ速ヲ乗スル例ノゴトシ

とある。(ここには明らかな計算間違いがあって、〈重＝3〉×〈腕の長さ＝1／4〉＝〈力＝1〉×〈腕の長さ＝3／4〉＝3／4とすべきところだ)

このような問題は、高校の〈物理〉では、「剛体にはたらく力」として学ぶ。〈力のベクトル〉や〈力のモーメント〉という用語が出てきて、すべての力のベクトルの和が$\vec{0}$、任意の点のまわりの力のモーメントの和が0、が剛体のつりあう条件である。

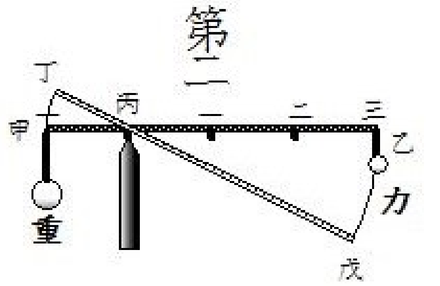
ただ、幸民は「猶前篇ノ重ニ速ヲ乗スル例ノゴトシ」といっているのだが、〈つり合い〉の説明に〈速〉が出てくるのはどういうことだろう？

「前篇」にあたる巻五は「動」のタイトルで〈運動〉について解説されている。ある速さで移動する物体の運動を説明したあと、「速ヲ以テ一躰ノ他躰ニ触ルヽ力ヲ知ル。故ニ速力ヲ動力ト名ツク。……物ノ動力ハ重ヲ乗ジタル速ニ同ジ」とあって、これは、いまでいう「運動量＝(質量)×(速度)」に相当する物理量をいっていることがわかる。

これをふまえて、〈つり合い〉でいう力のモーメント(重さ×支点からの距離)と〈速力・動力〉＝〈重〉

×〈速〉、が同じとしているようなのだ。そして、そのあとの〈つり合い〉の話では、次のように説明が続く。

假ニ[乙丙]ノ長サヲ三寸トシ、[甲丙]ヲ一寸トスルトキハ、[乙]ノ速ハ三ニシテ、[甲]ノ速ハ一ナリ。故ニ此槓杆ヲ平ニセムトスルニ、[甲]ニ九錢ヲ掛ケ、[乙]ニ三錢ヲ掛クルトキハ、即チ平均ス




とあって、繰り返し〈速〉が使われているのだ。〈つり合い〉の問題に、唐突に〈速〉と出てくると、「速度」がどう関係しているのだ、と戸惑ってしまう。「腕木の長さ」とだけ説明したほうがわかりやすいと思うのだが、それはこれまで学校で習ってきた理解があるせいか……

幸民の訳述した『気海観瀾広義』の原本はオランダのヨハネス・ボイス(Johannes Buijs)によって書かれた自然科学の啓蒙書『Natuurkundig Schoolboek』である。内容は、先生(本文では〈Mr.〉と表記される)と生徒2名(〈Heintje〉と〈Jantje〉として登場する)の会話形式で話が進み、自然科学に関するいろいろなことが説かれている。幸民は、先生の解説を中心に翻訳し、『広義』としてまとめたわけである。

そのあたりのところを原本(註 1)で確認してみると「猶前篇ノ重ニ速ヲ乗スル例ノゴトシ」というのは、「……,gelijk aan het gewigt(重) met de snelheid(速)vermenigvuldigd(乗)」という一文にあるようだ。(原本は2分冊になっていて、後編の第2章　第8話　Over de enkeyoudige Werktuigen,bijzonder den Hefboom　〈簡単な道具、とくに　てこ　について〉p62)そのあと、「第二図」(原本では〈Fig.26〉、〈力〉〈重〉は〈M〉〈L〉、[甲乙丙丁戊]は[ABCDE]の符号になっている)の説明に移るのだが、『広義』に〈速〉と出ているのは、原本に同じようにでてくる〈snelheid〉の訳であることがわかった。講談社のオランダ語事典を見ると「速さ、速度、快速、高スピード」の訳語が出ており、幸民の訳が突飛なのではなく、忠実に訳した結果なのであった。

ギリシャ時代のアリストテレスは、〈つり合い〉について、両端でつり合っている重さの比は、腕の長さに反比例すること、腕が運動した場合、腕の描く円弧の長さは重さに反比例することを知っていたらしい。今日的に〈つり合い〉問題というと、動きの止まった静止状態を思うのだが、アリストテレスは、わずかな動きがある状況を想定して考えたようなのだ。ふたつのおもり(ここは「重」「力」に相当)をかけたとき、それがわずかに動いたときの「速度」、いいかえれば同時間に動いた距離(この図でいえば、「甲→丁」、「乙→戊」)が、おもりの重さに逆比例するという結論を出した。これは、後に〈仮想速度の原理〉と呼ばれるものである。位置の変化に着目して〈仮想変位の原理〉ともいわれる。『広義』の原本を著したボイスは、こういう話を知っていて、〈つり合い〉の説明に〈snelheid〉を用いたのではなかろうか。

ついでに『広義』の物体の落下の説明に「第一時ニ幾許ノ限ヲ経レバ、第二時ニハ三倍シ、第三

時ハコレヲ五倍ス。……」とある。これと同じような説明が、ガリレイ『天文対話　下』にあって「もし、第一の時間に運動体が静止から出発してある距離たとえば一丈を通過したとすると、第二の時間には三丈、第三の時間には五丈、……」(青木靖三訳・岩波文庫)とある。ボイスが『天文対話』を参考にしたかどうか知らないが、このような話を紹介しているところにボイスの物理学(自然科学)に関する博学ぶりが感じられるわけだ。

先に『広義』の巻五〈運動〉の話をしたが、「総ベテ物ノ動力ハ重ヲ乗ジタル速ニ同ジ」と〈運動量:$mv$〉の説明のあとに続けて、「然レドモ能動ノ物、他物ヲ衝突スル力ノ発見スルハ其速ノ冪ニ同ジ。速ノ冪ハ速ヲ自乗シ、且ツコレニ其重ヲ乗ズル者ヲイフ」とあって、〈運動エネルギー:$mv^2$ 〉についても述べられている。ただし、ここではまだ係数 1/2 がついていない(係数 1/2 をつけたのは、力学などを研究したコリオリ(G.G.Coriolis)の業績)。日本で〈エネルギー〉の語が一般化するのは、明治以降(註 2)のことだし、18 世紀前半は、まだ〈エネルギー〉概念が、いまのように整合されていない時代であるが、当時としては最先端の科学知識を扱っていたのが『広義』なのである。明治の学制が発布されたとき、理科の教科書のひとつに採用されたのも当然といえよう。

幸民は『遠西奇器述』で〈蒸気機関〉などを紹介しているが、『広義』以後、化学だけでなく、範囲を広げて物理学についても訳述を進めることができていたら、「熱力学」とか〈エネルギー保存則〉を紹介する最初の人になっていたかもしれない。さらに「電磁気学」など 18 世紀中頃に発展した当時最新の物理学も紹介できたと思うのだが……。

(註 1) Natuurkundig Scoolboek ,Johanes Buijs:早稲田大学古典籍データベースより
(註 2) 中村邦光・板倉聖宣「日本における「熱物質説」の否定と「熱運動説」の導入と普及の過程－翻訳物理書の調査を中心として－」(『科学史研究』Ⅱ,30(1991)p107-119)によると、寺田祐之訳『理科一斑』(1874)(カッケンボス著 A Natural Philosophy の訳書)が「エネルギー保存則」を日本で初めて紹介した、と説明されている。

# 中後茂さんを偲ぶ（寄稿文を振り返って）

**「歴ネットさんだ通信」編集子**

昨年 10 月に歴ネットさんだ会員の中後さんが亡くなられてから半年が過ぎました。中後さんは「歴史文化財ネットワークさんだ(通称「歴ネットさんだ」)」創設以来の会員であり、会員の精神的な支柱でもありました。

これまで「歴ネットさんだ通信」への寄稿は 11 編におよび、“ふるさと三田の土の匂いを感じる”内容が多くあったと感じています。―なお、第 94 号(11 月 1 日号)に寄稿予定で、亡くなられる数日前に、打ち合わせをしたところでした―

そこで、寄稿していただいた内容を2～3行に集約し、読者に【歴ネットさんだホームページ】に掲載されている寄稿文を読んで頂き、中後さんを偲んでいただければ…と思います。

**第 2 号(2008. 10):閏年に思う**

閏年、農村地域では庚申さん(青面金剛)を祀る習わしがある。三田の貴志地区では庚申の日は、ボタモチとトマト(赤いモノが好き)を供えて供養。

**第 12 号(2010.09):車瀬橋**

橋の中程の欄干に三好達治の詩碑。昭和 59 年の改修時に橋の歴史や三好達治との関わりを紹介する碑文。この他車瀬橋にまつわる「攝北温泉誌」、「江戸時代の三田八景」、「摂州三田絵図」の古書籍等を紹介

**第 17 号(2011.07):三田博物館の石碑…40 年振りに里帰り…**

旧三田市民会館の側にあった「三田博物館」の石碑。2011 年 4 月に 40 年振り元博物館のあった場所(三田ふるさと学習館の向かい側)に、帰ってきたことに伴い三田博物館の歴史を紹介。

**第 21 号(2012.03):雨降らす竜の"うろこ"**

2012 年(平成 24 年)の干支はタツ。三田市北部にある永澤寺に竜のうろこと伝わる寺宝と伝説が 600 年前から伝わる。……

**第 31 号(2013.11):貴志の長楽寺と五山文学僧**

今は廃寺となっている「長楽寺」は南北朝時代に活躍した「貴志五郎四郎」の菩提寺。この寺の比定地と五山文学の高僧との因縁を記す。

**第 39 号(2015.03):高平上槻瀬「八坂神社の社号額」**

調査依頼を受け、社号額の裏面に書かれている「宝鏡寺宮御額」と享保 19 年の寄附という文字から、享保 15 年の京都大火で宝鏡寺が罹災者への救済資金を得るために看板書きをしてお救い米を稼いだのではないかと思料。

**第 49 号(2016.07):三田藩主の懐紙**

ある「お茶会」で公開された 11 代藩主九鬼隆徳公の和歌。「懐紙」と詠まれた内容を解説するとともに、古今集のなかの「「五月まつ　花椿の香をかげば　昔の人の袖と香ぞする」という和歌を踏まえて詠まれたものと推察。

**第 59 号(2018.01):戌(いぬ)年に思う**

平成 30 年(2018)は戊(つちのえ)の戌いぬ)年。この干支にまつわる話題を紹介。

**第 69 号(2019.09):竜の「うろこ」と「三足(みつあし)の蛙」**

母子の永平寺に残る二つの伝説について紹介。

**第 79 号(2021.05):貴志地区の陰陽石**

貴志地区に存在する風変わりな陰陽石二対、一対は御霊神社に残る『夜泣き石』、もう一対は貴志下地区にある瓢箪の格好をしている「瓢箪石」である。この「ひょうたんいし」の近くに「兵丹石」さんという家がある。この関係を今後調べたいが…。

### 第 88 号（2022.11）：三田藩の年貢増高

江戸時代、三田藩の石高は 3 万 6 千石。三田地域の石高は 2 万石であったが、江戸時代初期の藩主有馬豊氏の時代に 1 万石水増しされ 3 万石となった。「貴志や深田の灰やきだんご……」という“うすすり唄”に年貢が重く耐えてきた農民の心情が表れている。

## 歴ネットさんだ・お知らせコーナ

**○「ふるさと学習館企画展示」　10：00～17：00（但し月曜日休館）**

**・「九鬼水軍から三田へ…九鬼嘉隆とその末裔の足跡…」**

**期間：4 月 27 日（土）～7 月 28 日（日）**

**概要：九鬼家の源流、尾鷲久木浦から志摩に進出、波切、田城から鳥羽へ、そして織田信長・豊臣秀吉に仕え数々の戦歴を生き抜き、九鬼父子相戦った関ヶ原、大坂の陣を経て当主九鬼守隆の後継争いから勃発した「御家騒動」、そして三田へ…その足跡をパネルにて辿る**

**・この他、常設で「古代の三田」、「川本幸民コーナ」、「三田の地名不思議」等　開催中**

**○「三田ふるさと学習館講座」及び「三田市立図書館講座」**

**・日時：5 月 18 日（土）　10：30～12：00**

**・場所：三田ふるさと学習館**

**「九鬼氏：鳥羽から三田へ　～なぞの女性・宗心院（西照院）をめぐって～」**

**講師：歴史文化財ネットワークさんだ会員　池田洋介**

**なお、同日の講座内容等を踏まえ、内容を再編集して６月に図書館においても実施**

**日時：6 月 13 日（木）10：30～12：00**

**場所：三田市立図書館本館２F コミュニティホール**

---

編集後記

私達の活動する「歴史文化財ネットワークさんだ」（通称「歴ネットさんだ」）は前身の「文化財ボランティアさんだ」時代も含めて 25 年を経過いたしました。昨年度は記念してキッピーモール６階企画展示スペースで展示会、また鳥羽市から学芸員を招いて記念講演会を開催いたしました。

当誌も今年度中に発刊以来 100 号を迎えます。今後は、更に 200 号に向けて、三田の郷土史を中心にした情報を発信していきたいと思います。

引き続き、よろしくお願いいたします。（e. f）

---

「NPO 法人・歴史文化財ネットワークさんだ」発行

ホームページ　https://rekinetsanda.jimdofree.com

メールアドレス　rekinet3da@kjd.biglobe.ne.jp